羊と鋼の森 (2)

（柳のもとでピアノ調律師の見習いをしている「僕（外村）」は、あるとき店の顧客である佐倉家のふたご・和音と由仁からピアノの修理をたのまれました。その帰り際、「僕」はふたごに引き留められます。）

「それでは、僕はこれで」
帰ろうとすると、ふたごに引き留められた。
「乾燥のせいでしょうか、いつもより少し全体的に音程が上がっているような気がするんです」
「微妙に気持ち悪い感じがします」
口々に言い出した。確かに少し気になるところはあった。でも、おかしいと言うほどではない。触らなくてもだいじょうぶだと思った。触るとしても、僕じゃない。柳さんだ。
それなのに、①魔が差したとしか言いようがない。今の連弾で、完全に胸が熱くなってしまっていた。できるんじゃないか。微妙なずれだけを直せばいい。ふたごがもっと気持ちよくピアノを弾けるように。
ピアノは一台ずつ違う。わかっているつもりで、わかっていなかったのだ。初めて触るピアノ。乾燥しすぎている部屋。暑くないのに汗をかいた。緊張しているつもりもないのに指が震えた。わずかに回せばいいだけのピンを回しすぎてしまう。戻そうとして指が滑る。いつもなら難なくこなせる作業に途轍もない時間がかかった。少しだけ、少しだけ、と思いながら、望まぬほうに音がずれていくのがわかる。粒はまったく揃わない。やればやるほどずれて、焦ればさらに音の波をつかまえられなくなった。時間ばかりがどんどん経ち、②嫌な汗をぐっしょりかいた。今まで習ってきたことも、店で毎日練習していることも、どこかへ飛んでしまった。
そのとき、胸のポケットに入れていた携帯が震えた。ピアノから離れ、表示を見る。柳さんだった。今最もかけてきてほしくない相手であり、最もかけてきてほしい相手でもあった。

（中略）

「ん、どうした、外村。何かあったの」
テレパスか、と思う。こちらの気配が伝わったのだろうか。観念した。
「柳さん、すみません。明日の朝一で調律を一件入れていただきたいんです」
③気力を振り絞って、電話の向こうの柳さんに頭を下げた。
「佐倉さんのところ、今見ているんですが、触ってかえってだめにしてしまいました」
柳さんは三秒ほど黙っていてから、わかった、と言った。
なさけなかった。それ以上に、申し訳なかった。どうしても今日弾きたくて僕を見つけて連れてきたのに、結局は僕がだめにしてしまった。ふたごに申し訳ない。今日はもう弾けない。柳さんにも申し訳ない。店にも申し訳ない。勝手に触って勝手にだめにして、明日調律をし直すとしても代金は取れないだろう。

（宮下奈都『羊と鋼の森』文藝春秋　による）

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「魔が差した」とあるが、これはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア　ふたごから音程がおかしいと指摘があったが、自分ではそれほどおかしいようには思えなかったということ。

イ　確かに少しおかしいところはあったが、ピアノを直すのは柳さんであるべきだと思ったということ。

ウ　自分が直すべきではないのに、ついこれくらいの作業なら自分でできると思ってしまったということ。

〔　　〕

(2) ——線②「嫌な汗をぐっしょりかいた」とあるが、このときの「僕」の様子として適当なものを選びなさい。

ア　ふたごにもっと気持ちよくピアノを弾いてほしいと思い、一心不乱に作業に取り組んでいる。

イ　いつもなら難なくこなせる作業でも、初めて触るピアノなので時間がかかり、いらだっている。

ウ　自分がやるべきでない調律に手を出したうえに作業がうまくいかず、焦りを感じている。

〔　　〕

(3) ——線③「気力を振り絞って、電話の向こうの柳さんに頭を下げた」とあるが、このときの「僕」の様子として適当でないものを選びなさい。

ア　自分の調律がうまくいかなかったことを柳さんに知られないよう、なんとか取り繕おうとしている。

イ　勝手な判断でピアノをだめにした自分へのなさけない気持ちを何とか堪え、柳さんに助けを求めようとしている。

ウ　柳さんに迷惑をかけることになる申し訳なさから気が重いが、正直に事情を打ち明けようとしている。

〔　　〕